

始まった通信・放送連携時代 長所生かし合う仕組みが鍵

地上波デジタル放送がスタート、いよいよ通信と放送の融合が始まろうとしている。放送と通信の連携によってどのような新サービス、新市場が創出されるのか……。

通信の主役であった電話サービスに代わり、IP・ブロードバンドサービスは「新しい時代の担い手」として通信事業者の期待を一身に担ってきた。しかし、インターネット接続以外の付加サービスが整わず、また事業者間競争の激化に伴う低料金化によって、いまだ電話収入の減少を補うまでにいたっていない。

新たな収益を生み出すような、“ブ

ロードバンドならではのサービスが求められる中で、期待されているのが放送型コンテンツ配信事業だ。

通信事業者は一斉にこの方向に向かい始めた。しかし、それは放送事業者との緊張を生みつつ、同時に新たな連携が不可欠となる。

一方、放送事業者側にとっても地上波デジタル放送の開始で拍車がかかる放送メディアの多様化・デジタル

化の流れの中で、より充実したサービスを提供するため通信事業者のブロードバンドサービスとの連携が必須となっている。

“放送と通信の融合”によって生み出される新たなサービスとビジネスチャンスについて、NTTドコモの松木彰氏、日本放送協会の元橋圭哉氏、KDDIの片岡浩一氏に話し合ってもらった。

放送/ブロードバンド/モバイル事業者 座談会

日本の通信市場では、IP/ブロードバンド化、モバイル/ワイヤレス化、通信・放送の融合化などの大波が押し寄せています。通信事業者は歴史的な転換期に直面し、厳しいビ

ジネス局面だと思えますが、事業へはどのような変化が生じているのでしょうか。

片岡 ADSL、FTTHに代表されるブロードバンドサービスが急速に普

及する中で、従来の通信サービスや通信ビジネスの概念が根底から変わってきています。通信サービスの定額化・低料金化が進み、加入者が急増する一方で、ユーザー1人当たり

の利益率は大幅に下がっているという問題が生じています。

旧来の電話事業に代わる新たな収益を生み出していくためには、ユーザーのライフスタイルを演出できるような新しいサービスが必要であると、考えています。

そういう思いを込めて第1弾として提供を開始したのが、「KDDI光プラス」です。高速インターネット、IP電話、ブロードバンドという3つのキーワードを網羅しているのがポイントです。松木 移動体通信の領域でも、固定系のブロードバンド化を反映して高速化に対するニーズがこれまで以上に高まりを見せています。

私どもNTTドコモでは、FOMAによる論理値で上下384kbpsのサービスを提供しており、アップロードを重視する今のビジネスシーンでも十分に利用できる帯域幅を提供しています。auさんのWINも登場しており、今後高速化に向けた事業者間の競争はますます進んでいくでしょう。こうした市場環境を捉え、私どもも2005年にはHSDPAによる14Mbpsサービスの提供を計画しています。移動体通信におけるブロードバンド化も1つのキーワードですね。

NHKは通信事業者ではありませんが、こうした動きをどう捉えていますか。

元橋 ブロードバンド化は放送事業者にとっても見逃せないものです。通信業界で進むIP/ブロードバンド化、

モバイル/ワイヤレス化という流れの中で、私ども放送事業者の果たすべき役割はますます重要になってくると認識しています。NHKをはじめ東京、名古屋、大阪の地上放送事業者は2003年12月1日からデジタル放送を開始しました。放送サービスの高度化、周波数帯域の有効利用等が直接の目的ですが、これをきっかけにして放送と通信の連携という新しいサービスステージがスタートすることにもなります。

“連携”が新市場を生む

「放送と通信の連携」という提起がありました。これはどういう形態で進むのでしょうか、双方が互いの事業領域に踏み込んでいく可能性はあるのでしょうか。

片岡 私どもは光ファイバーを用いた映像配信サービスである「光プラスTV」を提供していますが、これは、決して「放送事業に参入するぞ」という強い決意からスタートしたわけではありません。無論、これはKDDIの新しい事業の柱になるサービスとして重点を置いています。光ファイバーを用いた高速大容量の通信サービスにはブロードバンドコンテンツの1つとして映像配信を外すことはできないというわけです。

元橋 2年ぐらい前ですか、「IPプロトコルの技術進歩が続けば放送もすべてIPネットワーク上でできるのではないか」という議論がありました。し

出席者(アイウエオ順)

NTTドコモ
MM事業本部MM企画部
技術戦略担当部長

松木 彰氏

KDDI
ブロードバンド・コンシューマ事業本部
ブロードバンド本部
ブロードバンド企画部長

片岡浩一氏

日本放送協会
総合企画室(デジタル放送推進)兼
マルチメディア局(デジタル開発)副部長

元橋圭哉氏

(司会 編集部 伊藤秀樹)

かし、私は相当長いレンジで見てもIP通信が現在の放送サービスと置き換わることは、技術的にもありえないし、ビジネスとしてもコスト的に成り立たないと思っています。

放送は1つの番組や情報を一斉に何千万、何百万という大勢の視聴者の方に同時に届けるメディアとしては非常に優れたものです。半面、通信のように個別ニーズには対応しにくいという面があります。逆に、通信は大量一斉の配信には向いていない。放送とブロードバンドネットワークは、それぞれの特性をうまく活用し、相互補完的にサービスを提供していく方向に進むのではないのでしょうか。松木 その通りですね。通信は放送のように1つのエリアにおいて広く、同時にコンテンツを流すことにはあまり向いていません。それよりも、“アップロード”という通信のメリットを生かすことが重要で、そこに放送と通信の連携の鍵があると考えています。

WIN
CDMA 1X WIN。11月28日から開始されたKDDIの第3世代移動体通信サービス。最大2.4Mbpsの通信速度を実現

HSDPA
High Speed Downlink Packet Access。3GPPによって開発された高速パケット伝送技術。FOMAなどの3Gに対し、3.5Gと位置付けられており、5MHzの周波数帯域で、最大下り14.4Mbpsの通信速度を実現する